

越前・若狭における近世墓の様相

村上 雅紀（越前町織田文化歴史館）

1. はじめに

本稿では、福井県内における近世墓の調査事例を埋葬方法・遺体収納容器・階層性といった視点から整理し、必要に応じて中世墓や近代の民俗事例も参考に、様相の把握に努めたい。

2. 近世墓の様相

(1) 埋葬方法

越前では、多賀谷左近墓所（金津町教委 1995）・三峯村墓地跡（鯖江市教委 2000）・伝無量寺跡（福井県教委 1975）で火葬骨が検出され、崇福寺（福井市教委 1997）から蔵骨器が出土した。また、乗泉寺遺跡（田中 1989）出土の越前焼甕や、明神山 18 号墳（福井県埋文 2008）の土坑群も火葬墓に関わるものと考えられる。中世墓の様相をみると、13 世紀後葉頃から 16 世紀代にかけて火葬墓が主流となり（赤澤 2006）、近世においても火葬が大勢を占めていたとみられる。その背景には、浄土真宗の広い普及がうかがえるも、法華宗などでは近年まで土葬を行っていた記録が残り（福井県 1984）、資料の蓄積を待って判断する必要がある。

若狭では、今市遺跡（美浜町教委 2007）・浜禰遺跡（同志社 1966）で土葬骨が検出されている。中世墓の様相をみると、越前と同じく火葬墓の事例が圧倒的に多く（赤澤 2006）、土葬の出現時期が注目される。15 世紀から 16 世紀初頭に位置づけられる芳春寺山中世墓群では、①火葬墓単一、②土葬墓単一、③火葬・土葬併存といった多様な埋葬方法が認められる（福井県埋文 2006）。土葬墓直上に火葬墓が造営される遺構や、火葬墓が土葬墓に切断される事例から、単に火葬から土葬に転換したのではなく、15 世紀頃から墓地内において土葬墓が増加するものの、いまだ火葬墓が併存し、16 世紀初頭にむけて土葬墓へ転換していく様相がうかがえる。

(2) 遺体収納容器

越前では、多賀谷左近墓所・崇福寺・乗泉寺遺跡・三峯村墓地跡から蔵骨器が出土し、4 遺跡 5 例のうち 3 例が越前焼である。これらの越前焼甕・壺は火葬骨の納入に用いられ、土葬にともなう甕棺としては利用されていない。遺跡の時期比定が可能な乗泉寺遺跡や三峯村墓地跡をみると、17 世紀初頭から 18 世紀代を通じて越前焼を蔵骨器とする。蔵骨器に越前焼を採用するのは、生産地が近く比較的入手が容易であったことに起因するのであろう。ただし、乗泉寺遺跡からは性格不明の唐津焼甕 2 点が発見され、多賀谷左近墓所では信楽焼壺が用いられる。

一方、蔵骨器を有しない伝無量寺跡や明神山 18 号墳では、茶毘に臥した遺骸を土坑内に直葬していたと考えられる。三峯村墓地跡の蔵骨器中からは鉄釘が検出されており、遺体を木棺に納めたまま茶毘に臥し、焼成後に火葬骨とともに木棺の残片を蔵骨器に納めた様子が復元できる。火葬の採用と木棺の使用が併存し、必ずしも木棺は土葬と直結するわけではない。

若狭では、蔵骨器の使用は認められず、土葬にともなう木棺および座棺の利用が顕著である。今市遺跡では座棺と方形木棺、浜禰遺跡では長方形木棺と座棺が検出され、日引遺跡（若狭歴民 1987）では土坑の形状とシュロ製紐の遺存から座棺の存在が想定される。芳春寺山中世墓群から木棺と考えられる痕跡が検出されており、16 世紀初頭にはすでに木棺が使用されていた。遺体の収納方法をみると、今市遺跡 S K 2 で仰臥屈葬、浜禰遺跡第 1 号墓で仰臥伸展葬と異なり、多様な形態による埋葬が行われている。

第 1 表 越前・若狭の近世墓

No.	遺跡名	所在地	遺構名	時期	上部構造	下部構造		葬法	遺物			備考
						土坑平面形	収納容器		土器	銅銭	その他	
1	多賀谷左近墓所	あわら市柿原		慶長 12 (1607)	石龕 宝篋印塔		信楽壺 1	火葬				戦国武将・多賀谷 左近三経の墓所 遺構・遺物図なし
2	崇福寺	福井市日ノ出					棺桶 2 蔵骨器 1	土葬？ 火葬？				不時発見 遺構・遺物図なし
3-1	乗泉寺遺跡	福井市笹谷町		16c 末～ 17c 初			越前甕 1	火葬？			唐津甕 1	唐津甕 (16c 末～ 17c 前) の性格不明 遺構図なし
3-2	乗泉寺遺跡	福井市笹谷町		17c 後			越前甕 1	火葬？			唐津甕 1	唐津甕 (17c 中～後) の性格不明 遺構図なし
4	三峯村墓地跡	鯖江市上戸口町	D-83	18 世紀	角礫？	不整形	越前壺 1	火葬			鉄釘	
5	伝無量寺跡	南越前町上平吹	ピット 3			円形		火葬	土師皿 1	寛永通宝 3		土師器片あり 遺構・遺物図なし
6-1	明神山 18 号墳	敦賀市坂ノ下	1 号土壙			不整形		火葬？		寛永通宝 1		覆土中より炭化物 近世墓か
6-2	明神山 18 号墳	敦賀市坂ノ下	2 号土壙			楕円形		火葬？				覆土中より炭化物 近世墓か
7-1	今市遺跡	美浜町佐田	SK1			円形	座棺	土葬	土師皿 細片 1			蓋材上に重し石
7-2	今市遺跡	美浜町佐田	SK2			隅丸方形	方形木棺	土葬				仰臥屈葬
8-1	浜禰遺跡	おおい町大島宮留	第 1 号墓			隅丸長方形	長方形木棺	土葬	土師皿 3		鉄製短刀 1 鉄鏃 2 鉄製品 1	蓋材上に重し石 仰臥伸展葬
8-2	浜禰遺跡	おおい町大島宮留	第 2 号墓			楕円形	座棺	土葬				座臥屈葬 第 1 号墓を切断
9-1	日引遺跡	高浜町日引	方形石組		方形石組							火葬場か
9-2	日引遺跡	高浜町日引	集石 A		方形集石	隅丸長方形	座棺？	土葬？			シュロ紐	
9-3	日引遺跡	高浜町日引	集石 B		方形集石							棺台か
9-4	日引遺跡	高浜町日引	集石 C		円礫集石					寛永通宝 1		
9-5	日引遺跡	高浜町日引	経塚集石	文化 8 (1811)	石塔 方形集石						経石？ 8870	
9-6	日引遺跡	高浜町日引	六角石幢	天保 3 (1832)								光明真言銘

(3) 階層性

越前では、多賀谷左近墓所で石龕および宝篋印塔が用いられており、福井藩の家老であった多賀谷左近の家格が示される。石龕の類例は、福井市重立町日吉神社の朝倉大炊助景賢石殿（1556）、坂井市三国町滝谷寺の開山堂（1572）、和歌山県高野山奥の院の越前松平家石廟などがあり（金津町教委 1995）、いずれも高位の武士や大寺院によって造立された。一方、他の遺跡では石塔の使用は認められず、地表上に墓標を有しない。副葬品をみても、伝無量寺跡から土師器皿 1 点と寛永通宝 3 点が、明神山 18 号墳 1 号土壙から寛永通宝 1 点が出土しているのみで、明確に階層差を示す資料はない。

若狭では、両墓制に通有の事例として「詣り墓」の墓標に石塔が使用される。反面、「埋め墓」には礫のほかに永続的な墓標を用いず、発掘された近世墓においても地表上に明確な墓標はない。また、墓の下部構造をみても土坑内に収納容器を埋納するのみで、石槨や石室などの施設は認められず、遺構の構造に階層性の差異を見いだしがたい。副葬品は、今市遺跡 S K 1 で土師器皿片 1 点、浜禰遺跡第 1 号墓で土師器皿 3 点・鉄製短刀 1 点・鉄鏃 2 点・不明鉄製品 1 点、日引遺跡集石 C で寛永通宝 1 点が出土した。浜禰遺跡第 1 号墓は他の遺構に比べて副葬品が豊富であり、木棺の内外に鉄製品が配されるなど、被葬者が丁重に埋葬された状況を看取できる。報告者が指摘するように、村内の有力者の墓であろうか（同志社 1966）。

(4) 両墓制の成立時期

若狭における墓制の変遷を考えると、両墓制の問題を避けることはできない。両墓制とは、「死体埋葬地点に施された一連の墓上装置の集合」と、「それに対応し死者供養のために建てられた仏教式石塔墓塔の集合」の両墓から構成される墓制である（新谷 1991）。一般には、「埋め墓」・「詣り墓」と呼称される二つの形態の墓地を有し、北陸では福井県三方上中郡から大飯郡にかけての地域に集中する。両墓制の分布と宗旨との関係も指摘されており、曹洞宗・臨済宗といった禅宗系宗派との関連が深い（佐藤 1977）。

民俗事例をみると、両墓制の分布域と土葬の分布域は大部分で重複し（福井県教委 1981）、両墓制の展開と土葬の普及には密接な関連があると考えられる。両墓制の成立時期は事例ごとに多様で、京都府京都市右京区（旧 京北町）では永正 5（1508）年紀銘の宝篋印塔の存在から、中世末期にまでさかのぼることが指摘されている（竹田 1966・1968）。では、若狭において両墓制が成立するのはいつであろうか。

御嶽貞義は、山田中世墓群の検討を通じて、火葬骨の埋葬（中世墓）から石仏の設置（墓標遺構）へと墳墓造営の目的が漸次変化するものと考えた。そして、地表上に石仏を立て土坑内に火葬骨を納める形態をその過渡期として捉え、「詣り墓」的な墓標遺構の出現をもって、14 世紀末～15 世紀初頭には両墓制が成立したとする（御嶽 2004）。

先にみたように、両墓制の展開と土葬の普及には大きな関連がうかがえ、「詣り墓」に近い形態の墓地の出現をもって両墓制の成立と捉えることは、やや性急である。両墓制の成立背景に死者の汚れに対する観念の変化があったと考え、と、「詣り墓」の造営と土葬の採用が両墓制の成立にとっての重要な要素となる。芳春寺山中世墓群の事例より、若狭では火葬と土葬が併存し、次第に土葬へと転換していくことを考慮すると、少なくとも両墓制の成立時期は 16 世紀初頭以後と考えられる。

3. まとめ

越前・若狭における近世墓のあり方は、対照的な様相であった。すなわち、越前では埋葬方法に火葬を採用し蔵骨器の使用例が認められるのに対し、若狭では土葬を主流に木棺および座棺に埋葬する事例が多い。その変遷は明確でないが、ほぼ近世を通じて近代にまで及ぶと考えられる。中世墓の事例をみると、若狭では16世紀代に土葬が定着し両墓制の萌芽も認められるため、この時期に墓制上の画期を設定できる。

一方、近世墓に表出される階層性の問題については、多賀谷左近墓所を除き墳墓の形態や墓標に明確な差異はない。また、副葬品は土師器皿と寛永通宝を基本とし、浜禰遺跡第1号墓出土の5点の鉄製品に注目すると、集落の墓地内においてもある程度の階層差の存在が認められる。

今後、近世墓の事例が飛躍的に増加するとは考えにくく、近世墓地における石塔の変遷や民俗事例の検討を通じて、様相の把握に努めたい。

【引用・参考文献】

- 赤澤徳明 2006「福井県」『中世墓資料集成 ー北陸編ー』中世墓資料集成研究会
金津町教育委員会 1995『金津町埋蔵文化財調査概要』
佐藤米司 1977『葬送儀礼の民俗』岩崎美術社
新谷尚紀 1991『両墓制と他界観』吉川弘文館
竹田聴洲 1966「両墓制村落における詣墓の年輪（一）」『仏教大学研究紀要』49 仏教大学学会
竹田聴洲 1968「両墓制村落における詣墓の年輪（二）」『仏教大学研究紀要』52 仏教大学学会
田中照久 1989「福井県丹生郡清水町笹谷乗泉寺遺跡の陶器について」『福井考古学会会誌』第7号 福井考古学会
同志社大学文学部 1966『同志社大学文学部考古学調査報告第1冊 若狭大飯』
福井県 1984『福井県史』資料編15 民俗
福井県教育委員会 1975『北陸自動車道関係遺跡調査報告書』No.6
福井県教育委員会 1981『福井県民俗分布図』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2006『福井県埋蔵文化財調査報告 第92集 芳春寺山中世墓群』
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター 2008『一般国道8号敦賀バイパス関係遺跡調査報告書 第1集 坂ノ下遺跡群』
福井県鯖江市教育委員会 2000『鯖江市埋蔵文化財調査報告第2集 三峯村墓地跡』
福井県立若狭歴史民俗資料館 1987『日引遺跡』
福井市教育委員会 1997『福井城跡Ⅲ』
御嶽貞義 2004「大飯町山田中世墓群における両墓制の出現に関する予察」『北陸石造物研究会設立準備連絡誌』vol.1
北陸石造物研究会設立準備会
美浜町教育委員会 2007『美浜町埋蔵文化財調査報告第6集 美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』